5/7

デモクラット

No.397 民主主義与生同盟 市大支部機関紙 5/7

米帝の侵略戦争拡大と日本独占の加担＝東南アジアへの侵出を阻止し、アジアに於ける平和共存体制を確立せよ。

□はじめに

全市大の学友諸君！

ベトナム人民の英雄的な斗いの前に、敗北を余儀なくされた米帝は、まさに最後のあがきとしてカンボジアへの侵攻、北爆の再始を行なった。この米帝の暴行は、社会主義勢力、民族解放勢力を中心とする反帝平和勢力の力の前に必ずや粉砕されるだろうこと、今日の世界における力関係を見れば明らかだろうし、しかも今日の米帝の行為は自らの若つまり米帝の弱さの表われとしてある以上、さらなるだろうことは既に、インドシナ四首脳会談・共同声明によって、インドシナの共通の敵たる米帝に対し、共同して斗うことが意志統一されている現在、我々は、彼らと連帯の内容が如何なるものかを明らかにする中で、はっきりと支援斗争を展開しなければならない。

1 ニクソンの「期待」と佐藤の「野望」

ベトナムでの軍事的、政治的敗北、それに伴なうドル危機と加えた米帝は、ニクソン・ドクトリンに見られる如く、アジアから一定程度手をひかざるを得ないと言う事情と、にもかかわらず自らのアジアにおける地位を確保したいと言う欲求との矛盾の中、インドシナ四首脳会談の実現によって、インドシナ人民の民族解放に向けての統一戦線が組まれようとする現在、米帝は、ベトナムでの敗北をもかえり見ず、カンボジアへの侵攻に出た。これは、インドシナ半島における反革命拠点喪失に対する米帝の焦燥の現れとしてあり、そこでの状況を一挙的に転換しようとするものである。かかる中で、反動と侵略に血道をあげている佐藤は、この期に乗じ、日米共同声明の実質化を行なおうとしている。すなわち日米共同声明において、インドシナへの侵出を「決意表明」した佐藤は、その具体化として、5月16・17日に行なわれる「アジア会談」への外相参加を決定している。この「アジア会談」とは、ベトナム戦争参加国を含む反共主義者の会合へ中国・北ベトナム等は参加しない）であり、そこでカンボジアの「中立」という美名の下での、コンソル政権のテコ入れ＝民族解放斗争の圧殺を企らもうとしているのである。

2 佐藤の侵略的策動を粉砕し、民族解放勢力との連帯の中、東南アジアにおける平和共存体制を確立せよ。

かかる中にあって、我々のなすべきことは、先ず第一に民族解放斗争の圧殺によって自らの利益を米帝との「共同行動」をとりつつ追求している佐藤政権に対する斗いであり、日米共同声明の実質化を阻止する斗いである。かかる斗いの徹底的追求の中にこそ米帝の「カンボジア出撃」と「北爆」を中心とするインドシナ侵略戦争に対する斗いが展開しうるのであり、又インドシナ半島において果敢に斗いを展開しているアジアの民族解放勢力との真の連帯が存在する。かかる斗いの貫徹の中に、米帝、並びに米帝との「共同行動」をとる日本独占を中心とする帝国主義者の侵略を粉砕することが出来るし、インドシナにおける帝国主義者の軍隊、基地の一切の撤去の中から、アジアにおける平和共存体制の確立へ言葉の真の意味において、自らの問題は自らが解決する体制を獲ち取れるのである。

インドシナ半島における民族解放斗争に勝利するのは、全世界的に団結している現在、侵略を企む佐藤内閣を打倒し、真に民族解放斗争に連帯しようとしているいなル。

平和と平和共存、反独占民主主義構造改革の実現へ